



寸法：W43.0×D44.0×H80.0cm (本体)
重量：本体 23.0kg 絞り機 4.5kg
容量：1.4kg 昭和30年代



洗濯槽の内部



絞り機は取り外しができ、
ハンドルは折りたたみが可能。

寄贈資料の中から 洗濯機

今回は、資料の中から洗濯機を紹介します。

この資料は電動で、昭和30年頃に購入され、昭和35年頃まで使用されました。上部に据えられているのはローラー式の絞り機で、ハンドルを回して洗濯物を脱水します。側面にはタイマーがついています。一人で持ち上げられるほどの重さですが、脚の片側に車がついており、傾けると移動が容易にできます。

この洗濯機には、洗濯槽の側面に水をかき回す羽根(パルセーター)が取り付けられています。噴流式と呼ばれる形式のものです。噴流式洗濯機は、昭和27年に輸入されたイギリスの製品を元に、各社で開発が進められました。電気洗濯機は昭和初期から国内でも生産されていましたが、高価なため一般家庭に普及していませんでした。噴流式はそれまでの洗濯機よりも安価なうえ小型で性能も良いので普及が進みました。

当時の洗濯物はワイシャツや浴衣、シーツなどで、現代とほぼ変わりません。素材は木綿がほとんどです。

脱水する際、絞り機にボタンが引っかかり取れてしまったり、しわが強うついたりするのに悩まされた人が多くいました。また、ローラーに洗濯物が挟まって動かなくなることもありました。そこで、ボタンを平らにならしたり、衣類を軽くたたんで絞り機にかけたりといった工夫がこらされました。しかし絞り機は性能がよく、かなり水を絞れたといえます。脱水装置として、台などに絞り機を取りつけて単独で使用する人もいました。

この頃の洗濯用洗剤は、当初は手洗い用の固形石鹼が主流でした。ペースト状や粉末石鹼も発売されていましたが、普及しておらず、洗濯機があっても洗剤が手に入らないので、どうやって洗うか困ったという人もいました。

昭和35年には二槽式洗濯機が発売され、新型の需要が拡大しましたが、噴流式洗濯機は昭和40年代頃まで活躍したようです。

職人昔語り

車大工 佐藤 柳太郎さん

出口の車屋

物を運ぶ車—今ではトラックのような自動車を想像される方が多いと思いますが、今から70年以上前、自動車は高嶺の花で、庶民が使う物を運ぶ車は人や牛馬が曳く木製の車でした。今号から人や牛馬が曳く車を作ってきた車大工の佐藤柳太郎さん(昭和5年生まれ)に車作りのことや昔の沼津のことについてを語っていただきます。

佐藤家は元々伊豆市八幡^{はつま}にあり農業を行っていたが、祖父弥三郎さんの頃に沼津市出口町(現沼津市幸町)に移って来た。当時の出口町は、大工・左官・鍛冶屋・経師屋・瓦屋・ブリキ屋・船大工などが集まる職人町であった。出口町では、鍬のような道具に柄をすげる木工の仕事を行っていた。そして、父初太郎さんの代から同じ木工でも車を作るようになる。

始めのうちは車の中でも木工で作る荷台や車輪の部分だけを作り、車輪に付けるワガネ(輪金)やシンボウ(心棒=車軸)といった鉄製部品の加工は他の鍛冶屋に頼んでいた。しかし、鍛冶屋からの納品が遅れることがたびたびあった。それでは車を完成させることができないので、父は家の向かいにあった機械の鉄工を行っていた江梨屋鉄工所に頼んで鍛冶の方法を学び、ワガネなどの車に取り付ける鉄製部品の製造を自分の家で始めるようになった。車作りが忙しくなると、それまで柄をすげる仕事を行っていた祖父も車作りに加わるようになり、一家をあげて車作りに取り組むようになる。

製造していた車は、人が曳くニグルマ(荷車)、牛が曳くウシグルマ(荷積牛車)、馬が曳くバリキ(荷積馬車)の3種類であった。ウシグルマとバリキの依頼がほとんどで、ニグルマの製造は数えるほどしかなかった。二輪の車が主であったが、ヨツワと呼ばれる四輪のバリキ(写真1)も製造したことがある。車を頼みに来る人々のほとんどは金岡や愛鷹の農家であったが、父が作る車は軽くて丈夫で壊れないと評判になるようになった。いつの頃か出口町にある車屋さん—“出口の車屋”と呼ばれるようになった。

佐藤さんが幼少の頃は「ケガをするから仕事場に入って来るな。」と言われ、鍛冶や木工に関わるのがなかったが、それでも手伝いとしワガネを熱した時に使った燃し木(薪)の片付けを行っていた。その後、沼津中学校(現沼津東高校)在学中から仕事場に入るようになり、鍛冶を行っていた父の手伝いとして向鎚^{むこうづち}を振るうようになった。向鎚とは、鉄を成形するため

の大きな鎚のことである。昭和22年4月から本格的に車大工としての道を歩むことになる。

出口の車屋には、父と祖父の他に3人の小僧がいた。小僧とは弟子という意味で、15歳頃から父に車作りを学びに弟子入りする。その後、修業期間を経て、一人前となると職人と呼ばれるようになる。修業期間が終わることを年季明けといい、他の大工や左官では技術的に未熟だと年季明けにはならないが、出口の車屋では徴兵検査を受けることで年季明けとなった。小僧も職人も住み込みだが、小僧の頃は毎月の給料というものはなく、小遣い程度の金額を渡していた。職人となることで一人前の給料がもらえるようになる。

佐藤さんが車作りを始めると、今まで手伝いとしてやっていた鍛冶での向鎚を振るう仕事の他に木工の組み立ての仕事を行うようになる。車の組み立ては色々と覚えなければならないことがあったが、すぐに仕事を覚えることができた。2、3年の内に父から材料となる木の買い付けを任されるようになる。

仕事さえあれば休みなく働いた。休日となるのは盆と正月ぐらいだが、盆も休まずに仕事をしていたこともある。朝の8時頃から仕事を始め、午前中は鍛冶の向鎚を振るい、昼食の後、木工の仕事を行う。火を扱っている鍛冶の仕事が終わるまで、昼食が延びることもざらであった。終業は夕方5時頃であったが、最も忙しかった頃は、明るいうちに家に帰ることができた日が年に2日程度で、午前0時に仕事場からあがることも珍しいことではなかった。

時代の流れは徐々に自動車の時代へと移っていく。それまで一部の商店や運送業に限られていたオート三輪(写真1)が、農家でも使い始めるようになる。昭和22年頃、三枚橋(沼津市)、三島(三島市)、吉原(富士市)、土狩(長泉町)などに車屋があったが、自動車を整備するための商売へと鞍替えするところも出てきた。昭和23、4年頃までは忙しかったが、昭和25、6年頃には車の依頼がなくなり、車屋を廃業した。その後は、これまでの技術を活かして様々な木工の仕事を行うようになった。

(話:佐藤柳太郎氏 昭和5年生まれ 沼津市幸町在住)



写真1:沼津駅前に停まるオート三輪とバリキ(ヨツワ)
(昭和33年頃 川上貢氏撮影)

沼津の石丁場遺跡

(4) 西浦江梨地区に残る角石

江戸時代のはじめ、西浦江梨地区では複数の大名家によって採石が行われ、石垣用の石材として江戸城へ運ばれました。古文書は、尾張徳川家、水戸徳川家、立花家などの名前が登場します。今回は大名家が競い合うようにして採石を行った、西浦江梨地区のうち田ノ輪周辺の様子をご紹介します。

田ノ輪丁場

西浦江梨集落の東方には山地が海に張り出した場所があります。海側は断崖となっていて、海に降りるのは容易ではありません。この岬を裂くようにして南側から小河川が海に注ぎ、山側に盆地状の地形を形成しています。この盆地状の場所に、田ノ輪という地名が残っています。現在は東西両側の斜面一帯にみかん畑が造成されていますが、畑の土台にはきれいな石積みがなされており、その石には石を割る為に掘られた矢穴が刻まれているものがあります。分布調査を行った結果、田ノ輪の東西両側の斜面一帯に石を採った作業丁場が認められました。

古文書によれば尾張徳川家の丁場の一つに「田ノ輪」という名称の丁場が伝わっており、この一帯が「田ノ輪」丁場があると考えられてきました。しかし、古文書に残された絵図面には、田ノ輪丁場の位置は山の東側斜面にあることが記されており、反対の西側斜面についてはどの大名家が設けた石丁場なのか判然としません。

田ノ輪の角石

その西側斜面には、貴重な石が残っていました。城郭の石垣には用途に応じて、角石、角脇石、枳形石、築石といった数種類の石が存在します。このうち角石は、文字通り石垣が折れる角の部分に使用される石で、直方体をしています。石垣にとっては主役級の石であり、良質な素材がないと切り出すことができない貴重

な石です。この角石が西側斜面の頂上付近に二つも残っていました。

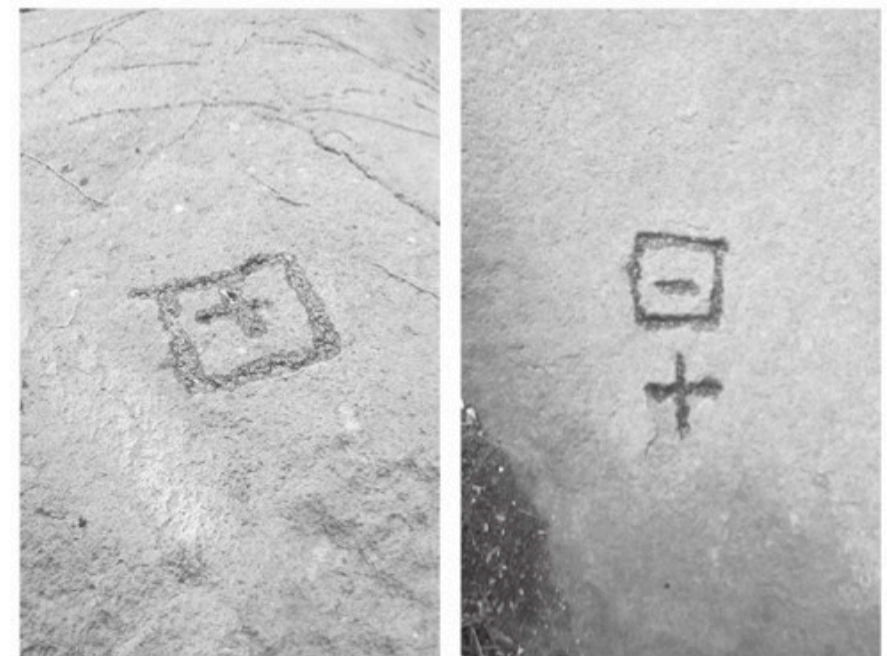


西側斜面の作業丁場

西側斜面のみかん畑の上にある林の中には、石丁場のあとが残っています。下の写真のように、巨大な石に何列も矢穴を刻んで長方形の石を切り出した痕跡もあり、角石もこのようにして切り出されたと考えられます。



山頂付近の石には下のような刻印も見つかっています。(左は杉山宏生氏発見)



魚見のある風景⑨ 静浦獅子浜（布島）

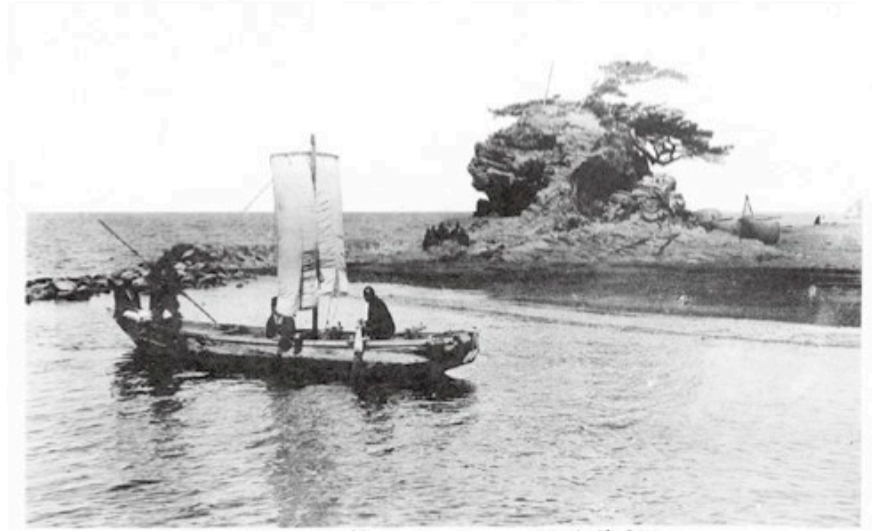


View of Nunojima Shidzura. 光風ノ近附島布 景風ノ浦静

静浦の獅子浜の海岸は、今では、高い防潮堤の建設と埋立てにより大きく変貌していますが、かつては馬込境の獅子浜城の岬(磯崖)から布島まで、そして狭くはなりますが、それから先の大久保山の裾までずっと砂浜でした。布島は、大久保山と同じ六角形の柱状節理が発達したデサイトの岩山です。

『静岡県漁業図解説書』には、獅子浜に地曳網の漁場が島合、小淵、家崎、布島、小浜、戸割落の6ヶ所あることが記されています。『静岡県水産誌』では、獅子浜は八百余尋の海岸を六分し、六組の網組が日々交番で操業していると記されています。なお、同書には、南部の小浜湾の12尋の砂底に、ハマゴイワシが6月下旬から8月に群来して産卵したことも記されています。

上の絵葉書では、大久保山の裾を道路が通り、自動車も走っています。石積みの防波堤も作られており、漁船のための小さな船溜りが設けられていたようです。右上の写真は、西間門の田中義光さんから提供して頂いたものです。上の写真とほぼ同じ頃の写真だと考えられるもので、布島の頂上に木の棒のようなものが写



島布浦静 (静名津沼)



View Of Shidzura Nunozu. 松磯岬の島布 (6) 景八浦静沼

されています。これでは、何か分かりません。その下の写真も田中さんから提供されたものですが、より古い姿を示していると見られ、正体がはっきりします。4本柱の高床式の小屋のような、低い魚見櫓が作られていました。その一部が残されていたようです。

『静浦の民俗』によれば、一つの漁場(網度)に一つの魚見があったようで、これは島の北側(裏側)に位置する布島網度の魚見でした。

資料館からのお知らせ

長浜城跡の史跡整備完了

文化振興課文化財管理係が、担当して進めてきました国指定史跡長浜城跡の整備工事が、昨年度末で完了し、5月24日、開設セレモニーと長浜城水軍まつりが開催されました。

長浜城跡は、北条水軍の海城として貴重な存在ですが、それだけでなく、漁場跡としても重要な場所です。裾に広がる地先の海は、鮪などの建切網漁の網度として使われてきました。西浦在郷の被官衆の一人であり、長浜城の最後を任された大川兵庫の子孫であるオオヤ大川家などの家々に伝えられてきた漁業に関わる大量の古文書は、戦前に渋沢敬三によって収集され、『豆州内浦漁民史料』として世に出されました。

現在、史料は立川市にある国文学研究資料館が所蔵

しています。平成26年2月に、オオヤ大川家に残されていた一部の古文書を寄託していただきました。合わせて、大川四郎左衛門翁の愛用品や同家で使用していた道具類の寄贈も受けました。寄託史料は目録を刊行すべく、現在、整理中のところです。

沼津市歴史民俗史料館だより

2015.6.25 発行 Vol.40 No.1 (通巻206号)
編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷 2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>
E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp